

- f. 三尖弁機能障害
- (4) 年少者で弁置換術を行った場合の長期予後
- (5) 外科手技の改良
- 房室弁機能の改善, 保存
  - 中隔形成
  - 刺激伝導系障害の防止
  - 溶血の防止
- (6) 術前に院内死の要因となるもの
- 著しい心拡大
  - 著しい肺血管床閉塞
  - 著しい房室弁の解剖と機能の異常
  - 著しい心不全
  - 著しい心筋線維症

f. 著しい肺合併症

以上, 本症の術後長期予後の解析には, 各解剖学的構成要因とそれに基づく血行動態的負荷が夫々関与している。

現在までのところでは, 合併症, 残遺症を伴うものが少なくなく, 術後の罹病度は低くない。

最近では手術手技の向上により, 弁機能の温存あるいは弁機能の改善とともに中隔形成が行なわれるようになった。また適切な弁置換の適応によって重症例でも少なくとも術後短期経過は良好である。刺激伝導系損傷の発生率の低下もみられ, 50年代以後の長期予後は40年代のそれよりもはるかによくなることと思う。

## 先天性心疾患術後長期予後調査

日大小児科 大 国 真 彦 原 田 研 介  
伊 東 三 吾

都立豊島病院心臓外科 蛭 名 勝 仁

### I. 研究目的

今日, 多くの先天性心疾患に対し開胸手術が行われている。しかし術後の管理基準は今だ十分に検討されていない。我々は肺動脈狭窄症(以下PSと略す)及び心内臓床欠損症(以下ECDと略す)に対し, 長期予後調査を行ない合併症の有無, 日常生活状況を知る事により術後管理基準の指標とする。

### II. 研究方法

術後2年間以上経過しているPS, ECDに対し厚生省によるアンケート調査表を郵送した。回答のえられなかった例に対しては再郵送を行なった。

### III. 研究対象

昭和50年12月31日までに日大板橋病院胸部外科及び都立豊島病院心臓外科において開胸手術をうけ, 現在生存しているPS:15例, ECD:5例の計20例である。他に合併奇形のあるPSは除外した。年齢はPS:2才8ヵ月~11才11ヵ月(平均9.2才), ECD:5才~24才1ヵ月(平均18才)である。

### IV. 成績

調査表郵送総数20例に対し, 回答のえられたもの9例(45%)であった。回答のえられたものの内訳はPS7例(根治手術1例, 交連切開術例6例), ECD2例(根治手術2例)であった。調査表の内容についてはPS, ECD共に発育, 運動能力等, 良好な結果がえられた。また現在の体調は, NYHA分類で不明の1例を除いて全例PS, ECD共に術後2度になっていた。手術効果はPSは全例よくなっており, ECDは余り変らないとの回答が1例あったが, 他の1例はよくなっていた。合併症としてECDの1例にA-V blockがあり, 現在ペースメーカー植込みをうけている。結婚はECDに1例いるが, 妊娠歴はない。現在心臓病薬の服用は, PS, ECD共に1例もなかった。

### V. 考 察

症例数が少なく十分な調査結果がえられなかったが, PS, ECD共に現在日常生活に不自由を感じさせる回答はなかった。しかし本人の自覚症状と合併症の有無はあまり関係ない様に思われた。なぜなら, ECD例にお

表 1 心臓手術予後調査表のまとめ

		PS	ECD			PS	ECD
I. 現在の生活状況				(3)現在症状	なし	5	2
B. 幼児					あり(風邪)	2	
(1)手術後の発育	(イ)よくなった	1	1	(4)手術の効果	(イ)よくなった	7	1
(2)知能の発達	(ロ)普通	1			(ウ)余り変わらない		1
(3)同じ年頃の子と比 し	(イ)同じにあそぶ	1		(6)退院後	(チ)ペースメーカー植込		1
(4)運動能力	(イ)増加した	1		(7)結婚と妊娠	結婚した		1
C. 学校にゆく年齢					妊娠していない		1
(1)手術後体の発育	(イ)よくなった	2		(9)心臓薬	(ウ)のんでいない	6	2
	(ロ)変わらない	3			不明	1	
(2)術後精神的性格的 に	(イ)明るくなった	2		PS : 7/15 例 (46.7%)    男 : 女 = 5 : 2 2才8カ月~11才11カ月 Valvulotomy 6例 Radical ope 1例			
	(ロ)活発になった	1	1	ECD : 2/5 例 (40%)    男 : 女 = 1 : 1 5才~24才10カ月 Radical ope 2例 合併症1例 : A-V block (家婦) ペースメーカー植込み			
(3)現在	(イ)小学校	3	1	注 : ECD の Radical ope は死亡1例有り。			
	(ロ)中学校	1		(1978. 2. 25 日大小児科)			
	(ウ)高等学校	1					
(4)学校に	(イ)行っている	5	1				
(5)体育は	(イ)普通にしている	5	1				
D. 職業について							
(1)職業	(ロ)ついていない		2				
(2)現在の体調	不明→(1)	1					
	(2)→(1)	1	1				
	(1)→(1)	4	1				
	不明	1					

いて A-V block の合併があり、現在ペースメーカー植込みを受けているものが手術効果良好と答え、特に問題のない例があまりよくならないと回答している。これは、

術前の状態の違いによると思われる。今回はアンケート調査のみであるが、次回は ECG、胸部X線等の検討を予定している。

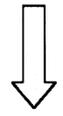
## 小児心疾患の長期管理基準の設定に関する研究

1. 肺動脈弁狭窄症手術予後調査成績
2. 心内膜床欠損症手術予後調査成績

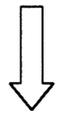
滋賀医科大学第1内科 河 北 成 一  
国立愛媛病院循環器科 水 野 裕 雄

国立愛媛病院において肺動脈弁狭窄症及び心内膜床欠損症の昭和50年迄の手術例は30例であり、20例は追跡調査は可能であったが、9例は音信不明であった。肺動

脈弁狭窄症で術後調査可能であったものは12例で、心房中隔欠損症、心室中隔欠損症を合併したものと及びファロー四徴症は除外した。なお1例は術後40日目に敗血症で



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



.研究目的

今日,多くの先天性心疾患に対し開胸手術が行われている。しかし術後の管理基準は今だ十分に検討されていない。我々は肺動脈狭窄症(以下 PS と略す)及び心内膜床欠損症(以下 ECD と略す)に対し,長期予後調査を行ない合併症の有無,日常生活状況を知る事により術後管理基準の指標とする。